

■エッセイ

絵本『はらぺこあおむし』

制作の舞台裏

——当時の日本絵本作り出版事情など——

森 比左志

(森久保 仙太郎)

絵本『はらぺこあおむし』は「エリック・カールさく」

「もりひさしやく」となっている。この作と訳いささか正確ではない。有り体にいうなら、「アン・ベネデュース作、エリック・カール画」となり「もりひさし文」また「日本語」などとなるうか。

カールの手作り色紙によるコラージュ（貼り絵）の絢爛とした美しい画面が絵本はらぺこあおむしの評価を決定づけているのはたしか。しかしカール自身が伝えているように、「アンが居なかったら今私の絵本は一冊もないだろう」ということも肯ける。カールはちっぼけな虫が必死に生きようとするさまを描きたいと思っていた。その話のタネをアンが絵本の展開に活かし、カールがダミー（ひな型）に作る。アンの知恵を借りつつダミーを改作し12冊を重ねた。画面に形や大小の変化、虫喰いの穴をあけた。ファイナル

に蝶になる発見はダミーの四冊め、二人はこれで絵本の成功を信じ喜び合ったというエピソード。絵本に作者名として出ないのはアン・ベネデュースが版元ワールド・パブリッシング社の編集部長だったから。来日のおりアン・ベネデュースは、はらぺこあおむし絵本ができたその事情を講演している。はじめ、デザイナーとして描いたカールのポスターを見て評価、絵本制作に誘ったのもアンであり、はらぺこあおむしに続いて両人の協力により多くの絵本を生み出している。私の名を添えた日本版も多い。

1975年（S50）、偕成社での為事のあと私は編集部
の西野谷敬子さんに呼ばれた。その席での話は、偕成社初
めの企画、外国絵本 THE VERY HUNGRY CATER-
PILAR (by Eric Carle) の日本版を出すこと、そのネー
ミングを担当することだった。私は即座にお断りした。私
が語学者でないからである。西野谷さんの考えは斬新なも
のだった。外国絵本の移入に直訳をさけたい。原作を研究
理解したのち、日本の読者に馴染めるよう画面に添える日
本の言葉で再創作するということであった。引合いに絵本
『ちいさなきいろいかさ』（西巻孝子画・森比左志文 金の星社
1971）を挙げ、その絵本のことば、日本語のもつ美し
さ、音、リズム、それを今回の日本版にということに説得
させられる結果となった。この頃、翻訳のしごととは「横の
ものを縦にする」だけといわれ創造性の少い作業と目され